

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 平澤 毅

我が国造園学初期の重要な研究対象のひとつであった名勝の包括的な検討は、今日、十分とは言えない。他方で、名勝の観点は自然的なものと人文的なものとを同義的に含む点に特質を有しており、近年、著しく発展してきた遺産や景観をめぐる国内外の施策展開から注目すべき状況が高まっている。本研究は、日本における名勝地保護施策の具体的経過を明らかにし、文化財としての名勝地に含まれる概念などを検討することにより、名勝地の今日的な保護施策の在り方について総合的に考察することを目的とした。そのため、史蹟名勝天然記念物保存法が制定された 1919 年前後から 2015 年末までの資史料に基づく文献的考察を行った。本論文はこのようなことを示した第 I 章を含む全 7 章から構成される。

第 II 章（名勝地保護施策に関する基礎的考察）では、名勝地保護施策に関する基礎的考察として、保護制度としての「名勝」に関する基礎的な知見などを整理した。

第 III 章（日本におけるランドスケープ・遺産保全制度等の沿革と「名勝」保護施策）では、近現代を通じた国内外の施策等を検討し、今日、施策の統合的アプローチが求められていること、歴史や伝統を反映した遺産が良好な風景を構成するとの認知が広く普及してきたこと、そして、総合的なマネジメントの重要性が増してきたことを示した。そして、検証課題として、名勝の指定実績や保護措置の具体的経過、文化的景観保護制度との比較、計画に関する沿革と展開、の 3 つを挙げ、それぞれ第 IV 章、第 V 章、第 VI 章で考察した。

第 IV 章（名勝地概念の特性からみた類型と保護対象の変遷）では、人文的な名勝地の代表である庭園と、自然的な名勝地において、具体的な経過にそれぞれ特徴が認められることを示した。庭園については、近代に属するものや発掘された庭園遺構などに関する様々な検討と取組が大きく進展し、名勝地保護施策に固有な対象として定着してきた。一方で、自然的な名勝地については、環境行政との調整の下、既指定物件の保存管理の検討が進められてきたが、近年では、庭園における価値内容の多様化とも関連して文化的観点からの自然的な

勝の把握が進められて来た。そして、それぞれの発展の成果は、今日の名勝地保護施策において国内外の動向とも呼応しながら統合的に取り組まれつつある状況を示した。

第Ⅴ章（記念物と文化的景観の比較からみた名勝の対象把握と保護措置）では、日本の文化財保護制度上の「文化的景観」の対照概念で、名勝地を含む「記念物」とを比較するとともに、特に風景や景観の観点から文化的景観と名勝地の価値内容に含まれる主な関心の違いを考察した。そして、文化的景観が、地域を文化的な観点から把握し、主体—環境系において人間と環境との関係を形成している生活・生業・風土の文化性に関心の中心を置くのに対して、名勝地は、希少性や代表性に基づき選別的に対象を特定し、特に観賞を通じた審美性に着目する文化財の概念であるとの区別を示した。

第Ⅵ章（名勝の保存管理の沿革と保存管理計画の今日的意義）では、制度上、計画に関する明確な位置付けが無かった文化財施策において、1960年代後半以降、整備計画や史跡等の保存管理計画などの枠組みが実践されてきたことにより、個別事例的に発展したことを示し、名勝の保存管理計画に関する経過を検討した。そして、従来の現状変更等の取扱い基準の整理を中心としたものから、近年では、保護事業の基本方針を示すものとして名勝指定物件全体を対象とするものへ移行してきたことを示した。

第Ⅶ章（本研究の成果と課題）では、名勝地保護施策の経過について、地域の包括的施策の中でさらに発展する状況にあるとした。また、施策上の「名勝地」は、文化財行政のみならず、地域の環境・景観に関わる諸施策の一部を成すものであり、風景、名所、庭園などのほか、自然と人文の多義的な意味合いから、特に観賞という行為を通じて日本人と関連付く様々な場所を広く含む多義的な概念であるとした。そうしたことから、今後の名勝地保護施策の計画論的展開としては、名勝地そのものの計画と地域における包括的なマネジメントを適切に組み合わせる必要があるとした。

以上、本研究から、1世紀に及ぶ名勝地保護施策は、環境行政などの展開の中で抑制されて来た部分があるが、名勝地の対象把握や保護措置が発達してきたとともに、地域における総合的な施策展開が進展する中で、その役割と意義が明らかとなった。また、こうした知見をもとに、文化財保護制度の枠組みを超えて名勝地の多義性を発揮すべき計画論的展開を提示した。これらの成果は、これまで文化財保護制度の中で議論されてきた名勝地保護施策の将来的な展開に新たな観点を拓いたものとして評価できる。よって、審査委員一同は、博士（農学）の学位を与えるに十分値する論文であると判断した。